

現代アートやマリナクティビティなどを満喫できる

ワンランク上のアットホームな瀬戸内ライフ

香川県の島々で テレワーク!!

コロナ禍にあって、地方でのテレワークやワーケーションが注目され、それらを機に地方に移住を考える人が増えている。

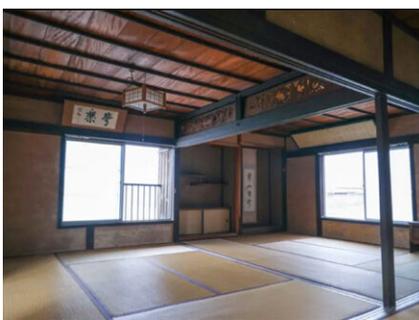
なかでも食や現代アートといった魅力が詰まった

瀬戸内の離島の人気は急上昇している。

そこで、瀬戸内国際芸術祭でも人気を集めた香川県の島々のテレワークやワーケーションの拠点を紹介したい。



1		
2	2	2
2	3	
4		



1/男木島全景 2/「鉄と本」の内観と外観。ぬくもりに満ちた空間で仕事に打ち込むことができる 3/福井さんたちが立ち上げた男木島図書館。冬場は薪ストーブを囲んで、島民たちが集い、語る場にもなっている 4/「鉄と本」の入口

鎌と本

香川県高松市男木町142
info@hoe-book.com
料金:1時間1100円~
hoe-book.com

男木島の`日常、を肌で感じながら 穏やかな気持ちでワークに没頭



男木島北端トウガ鼻に立つ男木島灯台。無塗装、庵治石造りの灯台は全国的にもめずらしく、「日本の灯台50選」にも選ばれている。「コンパクトな島だからこそ、海と山、それぞれの魅力や厳しさを身近に感じることができると思う」と福井さんは話す

高松港からフェリーで40分の海上に浮かぶ男木島は、人口約150人のアットホームな雰囲気

の島だ。近年は瀬戸内国際芸術祭の開催地になったことや私設の男木島図書館が誕生したことが話題となり、国内外から個性的な移住者が集いはじめている。

だが、その一方で「2019年の瀬戸内国際芸術祭では、はじめてオーバーツーリズムの課題を実感した」と(有)ケノヒ代表の福井大和さんは話す。福井さん自身もと男木島出身で、14年に家族とともにUターン、休校となっていた男木小・中学校の再開に奔走したり、男木島図書館の立ち上げに取り組んだり、島おこしの牽引役として活躍してきた。それだけに「オーバーツーリズムを経験したことで、人口が少なく高齢化率が高い男木島では、島を愛してくれ

る関係人口を緩やかに増やしていくことが重要だと痛感した」そう

だ。

そんな福井さんが関係人口づくりの一環として21年にオープンしたのが、コワーキングスペースの「鎌と本」だ。木造の堂々とした建物がかつての郵便局舎で「状態が非常に良く、最低限のリフォームと設備の導入で環境を整えることができた」と福井さん。施設内にはコワーキングスペースやミーティングスペースがあり、10人くらいは余裕を持って利用することが可能、和室のイベントスペース(26畳)では研修やワークショップなども行える。しかも、22年には島に光回線が開通したこともあって、都市部と同様のインターネット環境で作業に打ち込むことができるそうだ。

木の温もりと島ののどかな風景

に抱かれて仕事も順調に。その合間を縫って、島内散策にブラリと出かけるのがオススメの過ごし方。

「たとえば『ランチを近隣の飲食店やパン屋さんですませたら、男木島灯台に出かけてみたら』と提案している。特別な観光スポットがあるわけではないが、入り組んだ狭い路地や階段を抜け、海岸沿いの道を歩けば、知らず知らずのうちに男木島の`日常`に触れると思う」と福井さんは話す。

そして、よりダイープに男木島の人たちとふれあいたいなら、まずは福井さんとコミュニケーションを取ってみることだ。自身がUターン者であるだけに、移住の動機や当時の心情、そして島の魅力と厳しさなど、アレコレと話してくれるかも。もちろん、オフシーズンであれば近隣の人たちとの交流も楽しめるかもしれない。

テレワークやワーケーションが 移住促進につながる

コロナ禍を契機に、全国的にテレワークが普及している。事実、内閣府の調査によると、コロナ禍前(2019年12月)のテレワーク実施率は10.3%程度だったが、コロナ禍の20年5月には27.7%、21年10月には32.2%となっている。なかでも東京都23区は55.2%(21年10月)と圧倒的にテレワーク実施率が高く、それにともない地方でテレワークやワーケーションに取り組む人たちも増えているという。

こうした背景もあってか、香川県への移住者数も着実に増加しており、コロナ禍前の19年度は1976人だったが、20年度は2721人、21年度は2780人となっている。同県ではこの流れをさらに促進するため、テレワークを移住につなげることを目的とする施策などを実施しているので、その効果に期待したい。

こうした取り組みは、はやくも注目を集めており、都市部から多くの企業がテレワークやワーケーションなどで「鎌と本」を利用しているという。また、福井さんは22年にクラウドファンディングや補助金を活用し、「鎌と本」に隣接する空き家のリフォームに着手しており、この春には宿泊施設をオープンする予定とのこと。さらに進化を遂げていきそうな男木島のテレワーク・ワーケーション、ひとたび試せばやみつきになってしまいうさだ。



福井さんは2019年12月に以前から経営していたウェブ関係の会社の社名を(有)ケノヒに変更、事業内容を島おこしを加えた

「観光×仕事」というワークスタイルで 小豆島の自然と食を堪能!!

うみちかふらっと

香川県小豆郡小豆島町室生2211-3

Tel.0879-75-2266

料金:1時間330円~

www.shodoshima.jp/umichikaflat/

オリブやそうめん、醤油、佃煮など、豊富な特産品で知られる小豆島。瀬戸内海の島々のなかでは、人口が土庄町、小豆島町合わせて約2万6000人と多く、生活環境も整っているため、移住者からの人気も高い。

そんな小豆島にも2022年4月にコワーキングスペース「うみちかふらっと」が誕生した。運営しているのは小豆島町の第三セクターである（一財）小豆島ふるさと村。島中央部の三都半島の付け根にある室生地区で、滞在型・参加型の総合観光レクリエーション施設「小豆島ふるさと村」を運営・管理している。同財団道の駅課の秋村幸大朗さんによると「コロナ禍でテレワーク需要が増しているので、小豆島町が国や県の補助金を活用してこの施設を立ち上げることになった」という。

完成したのはオープンフロアのほか、瞑想できる静かな空間をイメージした「時の間」を含む個室4室・ミーティングルーム1室を備えた施設で、WiFi環境もバッチリ。個室は完全防音ではないが、音漏れは少なく、ウェブ会議などにも活用できそう。そして最大の魅力はなんと、いつでも、「うみちかふらっと」という施設名の通り、海がとて身近なこと。実際、「利用者からは『静かでオーシャンビューが素晴らしく、仕事に集中できた』といった声をもらっ



ている」と秋村さんは話す。観光資源が豊富な小豆島だけに、リフレッシュタイムも充実している。たとえば、ランチタイムには近隣にある道の駅ふるさと村に足を運んで、モチモチとした食感の生そうめんや小豆島らしさを堪能するのも一興だ。

また、この道の駅では多彩なアクティビティを体験できるので、余裕があればぜひとも挑戦してみたい。また、この道の駅では多彩なアクティビティを体験できるので、余裕があればぜひとも挑戦してみたい。

てほしい。「休憩時間にカヤックなどのマリナーアクティビティに興じたり、仕事終わりに国民宿舎小豆島がある丘の上まで歩いて行つて『日本の夕陽百選』に認定された絶景を眺めたりするのも最高」と秋村さんはオススメする。ちなみに、ふるさと村はこの国民宿舎のほか、キャンプ場なども運営している。「うみちかふらっと」を仕事の拠点にしなが、小豆島の魅力を存分に味わう中長期型のワーケーションを計画するのもおもしろそう。

上/道の駅ふるさと村で楽しめるマリナーアクティビティ 中/「うみちかふらっと」の内観と外観
下左/国民宿舎小豆島付近からの夕景 下右/道の駅ふるさと村の生そうめん

直島ならではの現代アートに囲まれて 豊かなインスピレーションを得る

直島町ふるさと海の家 つつじ荘

香川県香川郡直島町352-1

Tel.087-892-2838

料金:1泊3850円～

www.tsutsujiso.com

上段左/「つつじ荘」の全景。眼前に広がるビーチは開放感バツグン 上段右/敷地内の広場は島民の憩いの場でもあり、2022年からは直島アートユニットが「焚火イベント」を実施中。「今後は宿泊者と島民が交流できる機会にしていきたい」と泉さんは話す 下段左/カフェで提供される絶品ランチ 下段中央/「つつじ荘」ならではのトレーラーハウスとパオ 下段右/9年ほど前に静岡県三島市から直島に移り住んだという泉さん。飲食業などを経て、(株)直島アートユニットに参画。現在は「つつじ荘」のフロントマネージャーを務めている



現代アートの聖地として世界的に知られる直島。この地に「直島町ふるさと海の家 つつじ荘」がある。約30年前から営業する宿泊施設で、最近になってテレワーク客の受け入れを積極的にすすめている。

この施設はかつて直島町が琴弾地海岸線を保護・開発・活用するために設けたもので、建築家の石井和紘氏が「別天地」をテーマに手掛けたという。その空間は実に開放的。敷地には10棟のパオ（遊牧民族の移動式住居）と3棟のトレーラーハウス、3棟の和室棟が設けられており、いずれも宿泊できるようになっている。現在、この施設の運営を担う(株)直島アートユニット（直島のアート作品と宿泊施設の維持管理が主業務）の泉翔馬さんによると「ワーケーションなどで利用される方は、非日常的でありながらプライベートな空間を確保できるトレーラーハウスを好んで利用している」そうだ。アクセスは宮浦港から町営バス「つつじ荘行き」に乗って約15分、施設内はWiFi環境が整っているし、併設されているカフェでは瀬戸内の食材を生かした食事を楽しむこともできるので、ワーケーションにもピッタリ。また、団体利用が可能な大広間（56畳）もあるので、大規模な研修やワークショップを実施することもできそう。

日中の気分転換には眼前に広がる

ビーチですごすのがイチオシ。夏場の海水浴はもちろん、海を行き交う船をノンビリと眺めるだけでも、心身ともにリフレッシュできるはず。また、島の人たちとふれあいたいならコーヒースタンド巡りに出かけるのもいい。「直島には5つほどコーヒースタンドがあるので、コーヒーを飲みながら店の人に島のことをいろいろと聞いてみるのも楽しいと思う」と泉さんは話す。

仕事がひと段落したら、直島ならではのアート巡りに出かけてほしい。島内の美術館やアートプロジェクトには「つつじ荘」からシャトルバス（無料）や町営バス（片道100円）でアクセスできる。気軽に現代アートを堪能できる。また、宿泊者ならではの「特権」として楽しめるのが夜のアート巡りだ。「ベネッセハウスミュージアムは21時まで開館しているし、草間彌生さんの『南瓜』はもちろん、多くの作品がライトアップされているので、ぜひとも夜の直島を散策してみたい」と泉さん。散策で汗をかいたら、直島銭湯「I♡湯」（アーティスト・大竹伸朗氏が手掛けた入浴できる現代アート作品）でひと風呂浴びるのも良いかもしれない。

現代アートに満ちたこの島でワーケーションをすれば、ビジネスにもあらたなインスピレーションが得られること間違いなしだ。